

日本ハリストス正教会教団・西日本主教教区報

# 西日本正教

**No.151**

*Spring, 2022*

**西日本主教教区宗務局**

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会内

Email: [ocjwdiocese@gmail.com](mailto:ocjwdiocese@gmail.com)

電話・FAX (075)231-2453

郵便振替 01030-5-18547



国の重要文化財指定された生神女福音聖堂(京都ハリストス正教会)

# 〇教区ニュース

## 京都「生神女福音聖堂」

### 聖堂調査委員会 開催

七月二〇日(日)夕方午後五時半、聖堂調査委員会を京都市正教会において開催、出席、石田潤一郎先生、石川祐一氏、及川神父と川島伝教者。鐸木道剛先生とは、メールなどで連絡を取り合った。論文の執筆分担、写真・図面などの資料、年表などを内容確認を行った。できるかぎり写真資料をふやすこと、豊橋聖堂との比較をおこなうが、函館聖堂との比較は紙面と時間の関係からできないこと、年表を簡略化することなどが話し合われた。

「イコノスタス(聖障)の重文指定のほか、新たに至聖所内の聖像「至聖三者」「救主のゲフシマニア(ゲツセマネ)の祈り」二点の指定もめざしたいので、鐸木先生に論文の補充をお願いすることになった。ふつうならば一年くらいかけて、じっくり準備することがままならず、コロナ禍、緊急事態宣言下が重なり、時間との競争となった。

### 申請書と同意書 提出

八月下旬、京都聖堂の国・重要文化財指定へ向けて、京都府と京都市が、文化庁に申請書を提出。それに合わせて京都市正教会として「同意書」を提出した。内容は、国・重要文化財指定後は、国重文である聖堂を、京都府、

京都市と共に保全・管理していくことに同意するというものであった。

### 文化庁審議官 視察調査

九月二四日(金)文化庁 田中禎彦審議官による視察調査が行われ、府文化財保護課の福島氏、市文化財保護課の石川祐一氏と中村有希氏、教会から神父と伝教者が出席。朝九時半から、聖堂の内外はじめ天井裏の小屋組、床下の基礎部分などを視認、午後は「聖堂調査報告書」内容について精査した。報告書、文化庁への送付は一〇月一四日必着に決まり、ぎりぎりまで論文内容の調整、図面、写真等を多数掲載することなど、打合せをした。

### 府と市の文化財保護担当者との協議

一〇月二七日(水)午前、京都府文化財保護課建造物担当 島田豊氏と福島匠氏、市文化財保護課の石川祐一氏が来会、国・重要文化財指定後について協議。保護管理の主体が府文化財保護課、協力・市文化財保護課という体制となることが確認された。

聖堂拝観等、以前実施した「聖堂特別公開」など、すでに京都市正教会は積極的に取り組んでいると好評価。消防・防火機器、火災報知器年二回、避雷針年一回点検などに補助金制度。すでに中京消防署への直通回線の火災通報器があり、高評価。修復工事、補助の対象

## 京都聖堂調査委員会

五月、国・重要文化財指定へ向け「調査報告書」作成の準備作業に入った。聖堂調査委員会のメンバーは以下の通り。

石田潤一郎氏 京都工芸繊維大学名誉教授  
鐸木道剛氏 東北学院理事長特別補佐  
石川祐一氏 京都市文化財保護課  
及川信 京都市正教会長司祭

六月中に論文(レジュメ)概要を文化庁担当者と打合せ、調査報告書の内容確認をする。

調査報告書の編集には、川島大伝教者が担当することも決まった。前半は論文、後半は写真・図面などの資料、年表などを掲載。編集・発行者は、京都正教会となるため、新年度予算案に印刷費を計上した。

とはならない小さな修理等は市文化財保護課へ連絡、補助対象となる一〇〇万円までの小規模修理は府文化財保護課へ、大規模修復工事の計画については、府文化財保護課が窓口となり、文化庁と打合せ・相談をする。案内板は自費設置。防犯対策、聖堂東側、至聖所うら、早急に自費にて照明設備を検討することなどが話し合われた。



## 聖堂調査報告書 提出

九月末までの建造物調査報告書、文化庁への提出をめざしたが、危惧したとおり、論文がなかなかまとまらず、なんども書き直され、そのつど校正に追われた。なんとかまとめたのが一〇月初め、校正・訂正のため何度も、

早朝、夜にも、石川特殊特急印刷株式会社へ走り、担当者にも忍耐していただいた。報告書完成が三日、とりあえず文化庁の分四〇冊のみ製本、すぐに宅急便で文化庁へ送付、一五日審議会に、ぎりぎり間に合わせた。

## 報道発表

一月一九日(金)文化庁と京都府(府庁..教育記者クラブ)がそれぞれ会見をひらき報道発表、報道各社がその内容をいっせいに報じた。関西ではNHK、毎日放送、京都テレビ、京都・朝日・読売新聞などが、京都聖堂を取材、NHKは一九日夕方、夜等に放映した。この報道発表は内定を報じたもので、文部科学大臣による正式決定は、約三か月後、官報に告示され、「指定書」が京都正教会に交付される予定である。

## 感謝と御礼

このたびの国重文指定について、ご協力・ご後援いただきました主教品、神品教役者、各教会の信徒の皆様はじめ、聖堂調査委員会の皆様、アイコンに関する論文を補稿してくださったサワ鐸木先生、豊橋正教会の修復工事でお知り合いになれた文化庁はじめ愛知県、豊橋市、大学の研究者の皆様、京都府と京都市の文化財保護課、伸和建設の皆様を重ねて、

感謝と御礼を申し上げます。ありがとうございます。

## 京都聖堂が「このころの資産」

### 文化財でありますように

建物の国重文指定はありがたいことです。これからの修復工事の資金面に関する保全と、信仰の継承にとって重要な前進です。そしてもうひとつ大事なことは、この聖堂が祈りの神の家、信仰生活の場であるということ。京都聖堂はたんなる記念物ではなく、市と府そして日本という国の「このころの資産」文化財でなくてはなりません。市民、国民に、ほんとうの幸せを恵む教会、聖堂であることがわたしたちの祈りの原点だと思います。



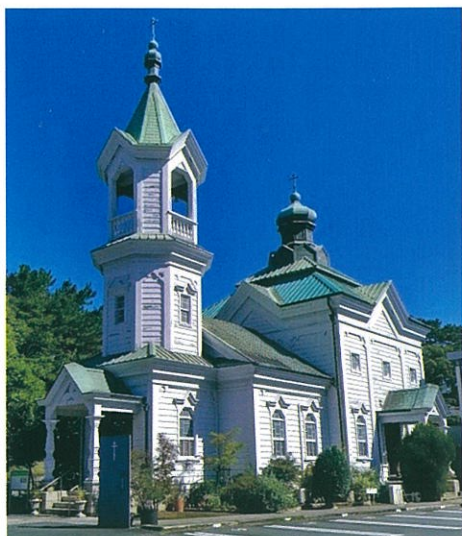
## ○豊橋「聖使徒マトフエイ聖堂」調査工事中

重要文化財指定の豊橋聖堂は、いま修復工事中、大屋根（テント）がかかり、全体が足場と防護ネットに囲われている。聖堂内部も同様で、足場が生まれ、なかで祈祷、奉神札を執り行うことができない状態である。

七月からは、ダニイル府主教座下の祝福を得て、会館ホールに於いて聖体礼儀やパニヒダを執り行っている。

九月二三日定例会では、聖体礼儀後、信徒総会も開催された。信徒一同、一日も早い常任司祭（聖職者）の着任を切望しており、教団、主教会議へ向け「請願書」を採択、提出した。

修復工事は、二三年度末までの予定。聖堂の成聖祈祷と記念祝賀会は、二四年一〇月第四日曜日が候補日となった。ちなみにいま名古屋の伊藤師と京都の及川師が牧会している。



## 聖使徒聖ニコライの不朽体嵌入式

### 京都正教会

二月一九日（日）主の降誕祭聖体礼儀に引き続き、「日本の光照者 聖使徒 聖ニコライ」聖像（イコン）への不朽体嵌入式（かんゆうしき）が執り行われた。聖堂の正門や南門などを開け放しての通気の良い環境での祈祷であった。



この日ひさしぶりに参拝者が五〇人以上の五五人を数え、来賓には聖像画家エウゲニア白石孝子先生ご夫妻、お客様にドミニコ幼稚園の安達園長ら、堂役もせいぞろいし、壮麗な祈りとなった。不朽体嵌入式はセラフイム

大主教座下のご教示のとおり滞りなく執り行われた。

イコンへの不朽体嵌入式は、京都正教会の歴史でも初めてのことであった。京都聖堂は、新春に国の重要文化財指定が正式に認証される予定であり、すこし早いお祝いとなった。西日本教区の主教座聖堂として、ますますの福音宣教の活発化、祈祷の充実などが期待される。

記念写真撮影のあと、西日本教区センターへ移り、降誕祭祝賀会。参加者四〇人余。乾杯のご挨拶フェオドル田中執事長、白石先生ご夫妻のご挨拶はじめ、全出席者にマイクがまわり、さいごにサンタクロースの登場、たのしいひと時を過ごした。

白石先生のお話によると、この聖使徒聖ニコライの聖像は、一九七〇年聖人列聖時に画かれたユリアニア・ソコロバのイコンが基本となっている。彼女は、至聖三者聖セルギイ大修道院にあるモスクワ神学アカデミア聖像課程の指導者であった。もともとはクロブク（修道帽）を被りリヤサの上に紫色のマントイヤをまとった姿であり、日本でもおなじみのスタイルである。のちに主教祭服を完装し宝冠（ミトラ）をかぶった姿など、多様なスタイルが生まれた。

このイコンの製作は全額、信徒の皆様からの献金によるもの。皆様の衷心よりの篤信に

深く感謝します。ありがとうございました。  
幾歳も！

長司祭パウエル及川信



## ○源氏藤袴会への加入について

伝教者ソロモン川島大

京都教会では、二〇二二年五月より新たな試みとしてフジバカマの育成を計画しています。まもなく国の重要文化財に指定される喜びのさなか、より一層地域に愛される教会を目指すべく、御所南エリアにおける連携を深めるのが狙いです。例年十月上旬に源氏藤袴会主催のイベントが行われ、本年は七日から十日にかけて予定されています。約二十箇所を巡るスタンプラリーや公道での展示会が主

な内容ですが、この期間にはラドネジの聖セルゲイ祭と主日とがちょうど重なっており、京都聖堂の存在を一般にも周知する絶好の機会となるでしょう。また、フジバカマは秋口に開花する植物のため、十字架奉栄祭での飾り付けや、敬老会での芳香剤や入浴剤といったオリジナルグッズの配布など、今から楽しみで仕方ありません。扱いは取り決めの厳しい植物ながら、近場で精力的に活動する団体の多い御所南ゆえ、しかもスペースを十分に確保できる京都教会だからこそ取り組めるプロジェクトと言えます。以下は信徒向けに行った説教です。

## 長旅

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう(マトフェイ十一章二八節)」。

京都市内あらゆる場所から目にするこのできる施設に「京都タワー」があります。盆地を取り囲む山上の展望台はもちろん、何気ない街中でさえ、その「灯台」は私たちの道標として、昼夜問わず人々の安全を見守っているかのようです。

「生神女福音」という聖堂名を持つ京都教会ですが、信徒にとってはこの生神女マリヤさまも「輝ける光の燈臺(『三歌斎経』七五三

頁)」。それこそ、二十世紀初頭の創建当時は周囲に高い建物も少なかったことで、から、名実ともに御所南の「灯台」として、街行く人々のためにも重要な役割を担っていたように思われます。しかしながら、近年ではそうした意味合いも薄れてしまい、今や悲しいかな観光のプロですら知る人ぞ知る教会の一つに過ぎぬ印象は拭えません。

さて、私がこちらへ赴任してお陰様で満一年となりましたが、趣味の街歩きがてら目に留まった魅力的な活動を皆様にご紹介させていただきます。十月頃お祈りへ参拝する際、この界限で背の高い草花をやたらと目撃した方も多いのではないのでしょうか。寺町通の寺社を中心し、近くの道沿いや銀行・郵便局の入口にも展示された「フジバカマ」。二十年ほど前に大原野で固有種の自生が確認されてから紆余曲折を経て、市内各地では現在この準絶滅危惧種の「秋の七草」を絶やさぬよう、保全・育成に関する取り組みが活発に行われてきました。

御池通から今出川通にかけては「源氏藤袴会」が旗振り役を務め、地域一丸となって藤袴祭やスタンプラリーなど、京町家に相応しい街興しに励んでおられます。どこか懐かしく「平安の香り」とも称される芳香に誘われる代表的な存在が「アサギマダラ」です。青緑と黒のまだら模様が美しいこの蝶は、フジ

バカマの花の「蜜」を求めて日本列島を縦横無尽に移動するほどの長距離を旅します。



京都タワーは元々「海のない京都の街を静かに照らし続ける灯台（公式ホームページより）」をモチーフに建設されました。その一方で、私たちの「灯台」には昔も今も変わらずに尽きることのない「生命の水」が満ち溢れています。信仰の諸先輩は、「聖書の花園を飛び回り、其花より最善き者を探りて：教の蜜を共に衆信者に其筵として進め（『祭日経』三四九頁）」られました。また、「秘密に：口を睿智の器に近づけて、彼處より蜜に愈り房より滴る蜜に愈る不死の水を斟み（同上、一二〇三頁）」つつ、人々に神様への讚美を促してこられた結果、私たちも「器よりす

るが如く饒に之を斟む（同上、九四二頁）」ことができず。

なぜなら、私たちの主イエスは「隅のかしら石（マトフェイ二一章四二節）」より湧き出ずる「蜜をもつてあなたを飽かせる（聖詠八〇章一六節）」神様だからです。そして、「蜜にまさってわが口に甘く（同上、一八章一〇三節）」心地良い主の御言葉は、人々にとって「魂に甘く、からだを健やかにする（箴言一六章二四節）」、言わば「わが足のともしび、わが道の光（聖詠一一八章一〇五節）」となります。

アサギマダラが飛来するのに伴い、季節の自然を愛でる人々もまた来訪するそうです。「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使たちをもてなした（エウレイ二二章一節）」善行を私たちは聖伝に学びます。けれども、ある地方の「人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、（奇跡を行われた）イエスに願い（ルカ八章三七節）」出ました。

私たちの聖堂は信徒一同の財産であると共に、文化財として地域に根差し、信仰の拠り所として人々に開かれた空間でなければなりません。時には壮大な宣教計画を掲げ実行に移す努力も大切ですが、まずは近隣の方、あるいは付近を訪れた方に、「広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地（出エギペ

ト三章八節）」の实在を知っていたくのが先決です。そのきっかけとして藤袴会への協力は大変意義深いものと考えます。ぜひとも、今年からは「香り草…を摘み、蜜…を吸い…ぶどう酒…を飲もう。友よ食べよ、友よ飲め。愛する者よ、愛に酔え（雅歌五章一節）」と呼び掛け、「心安らぐ教会、再び訪れたい場所」を提供しようではありませんか。

中京区にあるメイン会場の華堂行願寺



☆教区出版物最新号のご案内！

二〇二二年西日本主教教区 冬季セミナー

「とっておきのご聖体」

先備聖体礼儀―究極の精進料理―

講師 伝教者ソロモン川島大

ご購入希望の方は最寄りの西日本教区内の教会までお問い合わせください。

## ○西日本教区各地教会祈祷の報告

### 降誕祭・神現祭

未だコロナ禍にありますですが西日本各地では感染対策をしながら祈祷が行われております。

### 京都と豊橋の神現祭 主の洗礼祭 大聖水式

#### 京都生神女福音大聖堂

一月一九日（水）、主の洗礼（神現）祭聖体礼儀と大聖水式が執り行われました。例年、一九日当日と近い日曜日にも、執り行っています。

平日ということもあり、中くらいの大きさの聖水容器一つを、大聖水式で成聖しました。参拝者一五人。

つづく二三日（日）主の洗礼（神現）祭聖体礼儀と大聖水式が執り行われました。大中小五つの聖水容器を大聖水式で成聖、さいごの十字架接吻時に聖水を散布、また飲む信徒は、うれしそうでした。

教会が聖水容器と、それぞれ持参の聖水容器にはる聖水シールを用意しました。参拝者は四五人ほどでした。

この日朝から、BS・TBSの取材がありました。インターネットあるいはケーブルテレビで放送される「京都はんなり」という番組を制作するクルーが数名こられました。

執事会のある日でしたので、執事会のあと、神父がインタビューをうけました。放送日は、二月二三日以降で、この番組の放送時間内で、最大三分間放映されるそうです。再放送の回数が、とても多いそうなので、ごらんいただければ、ありがたいと思います。

京都聖堂については、一月二三日、毎日新聞の日曜版にカラーで紹介され、全国各地の皆様から、反響がありました。



#### 豊橋聖使徒福音者マトフエイ聖堂

一月二九日（土）晩祷、三〇日（日）主の洗礼（神現）祭聖体礼儀と大聖水式が執り行われました。中くらいの大きさの聖水容器一つを、大聖水式で成聖しました。

晩祷には一〇人ほど、主日の祈祷には、二八人が参拝しました。

国重要文化財に指定されている聖堂は、修復工事中で使用できず、いまは信徒会館で、祈祷と集会を行っています。

コロナ禍、まんえん防止措置期間中でもあり、婦人会総会は打合せのみ、執事会も喫緊の議題のみを協議し、いそぎ散会しました。

聖堂拝観などで配布する、A4両面カラー刷りのパンフレットのレイアウト、デザイン案を、川島伝教者が説明しました

一年ぶりにイグナティウ井清隆兄も参加、神父・伝教者と共に、豊橋の皆様と交流しました。姉妹教会ですので、これからますます、懇親を深めていきたいと思えます。（及川記）



## 大阪教会降誕祭

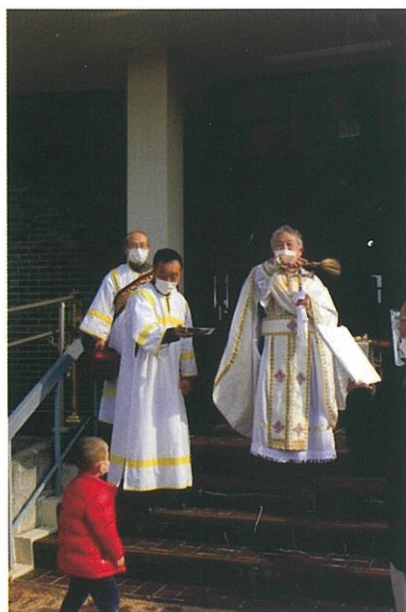
前年度の降誕祭は府の外出自粛要請下、密を避けるため四回に分けて実施しましたが、今年度はコロナ感染も落ち着いていましたので一二月二六日に例年通り実施しました。参拝者は七〇名と盛会。一月七日の旧暦降誕祭にも三六名が参拝しました。ただいづれも、祝賀会は見送り、ホールにイトイン・コーナーを設け、ミニバザーで出品されたお弁当、ピロシキ、ハチャプリ（ジョージア風味チーズパン）などの「黙食」と、その後の歓談にとどめました。そのほかにクリスマスツリーをだしたり、ホールを飾り付けたりして少しだけクリスマス気分を出しました。



## 大阪教会神現祭

神現祭は一月一六日に繰り上げて行われました。年初からのオミクロン株によるコロナ感染の急激な増加と、それに伴って教会より、各自の事情に合わせた参拝への慎重な対応をお願いしたた

め、参拝者は一九名にとどまりました。それでも大聖水式では祝福された聖水が、聖堂に、信徒たちにも、また境内地に駐車している車に、勢いよく振りかけられました。久しぶりのみんなの笑顔に、「撒水大好き」ゲオルギイ神父も大張り切り。また、神現祭の当日の一九日（水）にも大聖水式が行われました。



## 降誕祭 名古屋・半田教会

半田教会では一二月二十六日、名古屋教会では一二月二五日（新暦）と一月七日（旧暦）に降誕祭をお祝いしました。名古屋、半田両教会とも今年も祝賀会は中止となり、祈禱後は解散となりました。ハリストス生まる、崇め讃めよ。



半田正教会



名古屋正教会

## 降誕祭 豊橋教会

豊橋教会では一二月一九日に早めの降誕祭をお祝いしました。当日は四十日祭も予定されていたので、いつもよりも多くの四十名近くの参拝者がありました。



豊橋教会は常駐司祭が不在ながら、神父巡回以外の主日にも代式祈祷を毎週行っており、熱心な信仰で祈祷を守り続けています。聖堂の修復にはまだもう少しばかり時間を要しますが、成聖の暁には盛大にお祝いし、より若い世代と共に豊橋教会を盛り上げていけることを願っております。



### 神現祭 名古屋・半田教会

半田教会では一月九日、名古屋教会では一月一日に神現祭聖体礼儀と大聖水式を行いました。名古屋教会にとって神現祭は堂祭なので、例年であれば餅つきをして祝賀会を行うのですが、今年は食事を企画しましたところ、これもオミクロン株の蔓延により中止を余儀なくされました。と

はいえ、祈祷を無事に行うことができたことに感謝いたします。



### 広島地区で二年ぶりの祈祷集会

コロナ禍に阻まれ、集会を行えなかった広島地区で、一月二三日に二年ぶりの祈祷集会（聖体礼儀）が開かれました。以前借りていた会場はコロナ禍で「歌はダメ」とことわられたので、逆に音楽施設なら可能だろうと探したところ、市の文化施設「アステールプラザ」の「中音楽室」（定員五〇名）を半日で五千円ほどという破格の値段

で借りることができました。机や椅子の他に譜面台も自由に使えて便利でした。参加者は三五名、そのうち一般参加も五名と盛会でした。久しぶりに一緒に祈る聖体礼儀に喜びがあふれました。距離を取って、フェイスシールドもつけて感染予防対策を取った上で歌いました。次回は復活祭聖体礼儀、四月二十九日（祝・金）を予定しています。



### 和歌山正教会主の降誕祭

一月一〇日（月祝）一〇時半より、和歌山正教会、主の降誕祭祈祷集会在が、三木家において開催、小春日和の好天に恵まれました。降誕祭代式祈祷、ソロモン川島伝教者の説教、聖パンと赤ぶどう酒が供さ

れ、なごやかな歓談のうち、午前中に散会、参拝者一〇人。

コロナ禍のため、昨年秋一月に久しぶりに前田家で開催されたあと、オミクロン・コロナウイルスで実施を危ぶむ声もありました。三密を避け、みんな感染予防を徹底しながらの開催となりました。ご協力に感謝します。

伝統ある和歌山正教会をつづけることは、福音宣教の大事な橋頭堡となります。これからも大切に開催していきたいと思えます。

(及川記)



### 神戸正教会降誕祭・神現祭

新型コロナウイルスの影響の中ではありますが、神戸教会は感染対策をしながら降誕祭と神現祭が無事に行われました。祈祷が継続して護られていることに感謝。



### 柳井原正教会 降誕祭

二〇二二年一月九日、柳井原正教会に於いて、主の降誕祭聖体礼儀が執り行われ、十三名の参拝者があり、徳島より小川佑兄が二年振りに参拝。誦経奉仕をしてもらい感謝！

地元、岡山、福山、鳥取等より今年初めての祈祷に來られ、例年であれば信徒会館にて昼食と

ケーキ等で御祝いするも、ここ数日のオミクロン株の事も配慮し現地解散致しました。いつの日か皆さんと一緒に笑顔で歓談できる日を楽しみに！

来年は会堂が大阪より移築され六十年の記念の年！

徳島正教会・小川卓・記

### ○松山 ロシア兵捕虜・墓地祈祷

司祭の体力の事も考え、今年松山にて前泊させて頂き、例年通り、十一月三日、午前

十一時より松山・ロシア兵墓地に於いて、ここ数年、正教会からの出席も少なく寂しさを感しながら司祭夫婦と香川より大藪清兄、松山ロシア兵保存会、勝山中学校の皆様、十六名の出席を得、松山に寝るロシア兵・九十八名の為に、パニヒダが献じられ、彼等に永遠の記憶が為された。

祈祷後、皆様と一年ぶりの再会を得たことに感謝し、少し歓談。松山ロシア兵保存協会と勝山中学校へ清掃をして頂いていることに感謝し、徳島正教会より御礼をさせて頂きました。無事、夕刻に徳島へ帰路に着きました。毎年の事ながら、ロシア兵墓地保存会からも徳島正教会へ献金を頂き感謝申し上げます。来年の予定ですが例年通り十一月三日を予定しております。

一度、道後温泉のある松山・ロシア兵墓地へ来られるとは如何でしょう。皆様の来られるのをお待ちしております。詳細は徳島正教会まで！

徳島正教会

小川記



# ○正教をより深めるために

## 啓蒙書紹介

パウエル中西裕一著『ギリシヤ正教と聖山アトス』  
(幻冬舎、二〇二一年)



本書は東京復活大聖堂のパウエル中西裕一神父が二〇年間に何度も訪れた聖山アトスでの体験をもとに著した本である。日本においては正教会はもとより、正教の修道院についてほとんど知られていない中、アトスをもっともよく知る日本人であるパウエル中西神父が聖山アトスの正教修道精神を紹介する本書出版の意義は大きい。

「まえがき キリスト教の原点であるギリシヤ正教とは」では西洋古典哲学を学んでいたパウエル中西神父がギリシヤでの在外研究中に正教に向かったという著者自身の体験が綴られる。パウエル中西神父によれば、「哲学を学んでも自らの悔い改めや救いには、直接は結びつかないこと」(八頁)から、自らの信仰を重ねつつギリシヤ神父の著作へと向かう方向に変わったということである。

「第一章 なぜ正教なのか」では正教の教えと人間観の根本が語られる。正教において人間は自由意志を持ち、神の方向に自らを向けることができる一方で、神に相応しい生活から離れ、相反する罪に陥ることもある。その中で「自分のなかに備わっている神の像を手本として、神に相応しい自己を取り戻していくことこそ、正教徒としての人生そのもの」(二十八頁)というのが正教の人間観である。したがって正教という「神化(テオーシス)」とは人間が神になることではなく、あらかじめ与えられている「神の像」を手本として、神に相応しい存在へと「肖(に)」ていくことに戻っていく過程である(三十三頁)。そのためには悔い改め、祈り、節制、修練が必要であるが、ことさらに苦行や試練は意味をなさない。物質や肉体をおとしめる二元論と正教は相容れず、正教においては肉体と魂が一体となった人間が永遠の生命を得ることが救いとされる。

第二章以下においては正教を構成する様々な要素、すなわち聖堂、聖歌、齋などについて解説される。聖堂は神のみもと、天国を象ったものであり、そこで正教徒は神との交わりをもつ。聖歌は祈りの言葉であり、祈りは神を起源として発せられ、神に向けられるので、神に戻っていく。齋は一定のルールに従った節食行為であるが、それは知的活動を効

率よく進め、良質の睡眠を得るため、そして最終的な目的は正しい祈りをするためである。本書は以上のような正教徒に共通の基盤である内容に加えて、アトスの修道院にまつわるさまざまな知見と著者自身の修道院体験を含んでいる。聖山アトスは十世紀に端を発し、半島には二十の修道院があり、現在約一七〇〇人の修道士が祈りの生活を続けていること、そして修道院の生活は深夜と夕方の奉神礼が中心で、菜食が主で質素ではあるが新鮮で美味しい食事についてなどについての叙述が続く。

そして修道院でしか経験できないこととして、長老(イエロンダ)による霊的指導がある。聖山アトスにおいては司祭であるにかかわらず、霊的指導を担うのは長老である。長老は司祭である場合には痛悔機密において、司祭でない場合には日々の生活において修道士を指導する。長老は霊的生活にかかわる問題に「理屈」で答えることはなく、痛悔に関わる実践的課題として答えを示し、自分自身がその試みを模索し会得するのを待つのである。長老の指導によれば、痛悔とは結果として罪をどれだけ犯したかを並べたてるのではなく、心に潜む罪を犯す根源に目を向けることである。「外的な行為を罪として取り上げるよりも、その行為に至った要因を直視する、そのためには自分にしっかりと向き合うことです。そしてより本質的な罪を思い起こして、

そこから悔い改めること、再びその罪を犯さないこと、他の罪に波及しないように注意すること、主神の救いのちからを待み、すべてを主神に委ねて喜んでいることをめざします（一八〇頁）。長老による霊的指導の体験は、日本の正教徒にとっても体験する機会が極めて稀であり、その意味で本書による紹介は非常に価値あるものとなっている。



私も十年程前に聖山アトスの修道院に一週間ほど滞在したことがある。そこでは他に代えがたい貴重な体験をしたが、一番印象に残ったのは修道士のあり方である。正教の修道院は決められた規則に則っており、個人の恣意が入り込む余地はない。皆同じ服装（黒衣の修道服）、トラベザ（食堂）で同じ食事を

取り、聖堂に一同に会して、定められた祈禱文に従って祈る。そこではいわゆる個性はない。しかしそのような中でも修道士は実に生き生きと穏やかに過ごしていた。そこで私は定められた規則の中でも自由があること、むしろ他の人と敢えて異なることをすることが個性ではないことを悟った。それが私自身の聖山アトス巡礼の最大の収穫であった。

本書で紹介されたようなすばらしい正教の修道院を体験するために、コロナ収束の暁に男性信徒にはアトス巡礼をお勧めする。本書の末尾にはアトス巡礼のガイドが収録されており、巡礼の計画を立てる際に参考になるだろう。

司祭グリゴリー伊藤記

### ○奉神礼基礎講座

毎月第三土曜日にズームとYouTubeビデオを用いて、奉神礼と聖歌についてのオンライン講座を開いています。この講座では正教会が守り伝えてきた奉神礼の真の力を引き出すために、聖歌のことばや内容、聖歌の成り立ち、奉神礼の流れや暦にある深い意味をさまざまな角度からとらえなおし、各教会の状況に合わせて応用の効くワザと知識をシェアします。聖歌は聖歌隊にお任せではなく、神品と信徒、教会全体が「口を一に、心を一に（聖体礼儀から）」祈り歌うことを目指しま

す。

たとえば理論編では、昨年は聖歌のお名前シリーズとして「トロパリ」や「コンダク」を解説しました。トロパリは短い歌を聖詠に挟み込んで歌われたのが始まりで、その組み合わせ方でステイヒラ、コンダク、カノンに発展しました。三月一九日は「カノン（イルモス）」。カノンは旧約聖書の歌が修道院の祈りの伝統のなかで練り上げられました。

実習編では、正教聖歌の伝統のワザをとりあげ、効果的な使い方を説明します。たとえば「連祷」、神品にとっても信徒（聖歌隊）にとって気持ちのいいやりとりのタイミングを探ります。アンティフォンなどの「掛け合い」。今は聖歌隊がすべてを続けて歌っているけれど、ソロと「繰り返し」の掛けあいで歌うことで、ぐつと立体的にすることができず。ニコライ大主教は大半の聖歌を「楽譜」に書かせて配布しましたが、楽譜に書かれていないものもあり、あつても難しく歌いづらいことも多くあります。そんなときの解決法が「八調」のパターンで歌うワザです。

今年は、聖歌担当者を悩ませる「領聖前（神品領聖中）に何を歌えばいいか」を正教会の奉神礼と信仰のサイクル「準備と成就、斎と祝い」から考えています。復活祭から復活祭へ向かう一年のサイクルは、日曜日の聖体礼儀を中心とした一週間のサイクルに重なり、神の方へ向かう一生の歩みへとつながってい

ます。日本では領聖前に習慣的にイルモス（カタワシヤ）が歌われていますが、他の国では聴いたことがありません。「領聖前」はどんな場面なのか？「準備と成就」という奉神礼の流れから、どんな歌がふさわしいかをもう一度考えます。二月一九日は領聖の歌、交わりの歌と呼ばれる「領聖詞（キノニク）」へと話を進め、サンプルを上げて歌い方の工夫を考えました。

正教会は古代教会の考え方を守っています。器楽や伴奏を取り入れなかったのもその一つですが、音楽を「奉神礼」全体、信仰生活全体から切り離さないのが正教会です。聖歌は神の民の信仰を正しく神の方へ導くために神が与えた教育システムであり、喜びの分かち合いです。知れば知るほど正教の奉神礼は興味深く、喜びを拡大することができます。そこへ人々を招くのが宣教です。可能性は無限大です。

Zoom はスマホでも参加できます。今までの番組はこちらからご覧になれます。

<http://www.orthodox-jp.com/westjapan/Hoshiirei-Kiso-online.html>

（講師：マリア松島純子記）



## ○熊本県復興報告

### いまの人吉

人吉ハリストス正教会  
司祭グリゴリイ水野宏

一昨年七月四日の令和二年七月豪雨災害から一年半が経過しました。

市内は昨年秋頃から、ようやく被災した事業所や旅館などの営業が再開しつつあります。その一方、最も被害が大きかった上青井町や紺屋町など、昔ながらの商店街地域は、建物が解体されて更地が広がっており、寂しい景色が広がっています。

### 更地が広がる人吉市中心部



### 新装開店した発船場



人吉観光の目玉の一つである「球磨川下り」は、猛ピッチで再建が進められ、災害発生から一年となる昨年七月四日に真新しい発船場が開業しました。コロナが収束しつつあった昨秋から年末にかけては、観光バスで団体客が来るなど、復興への明るい兆しが見えたようにも思いましたが、年明け後のオミクロン株の感染急拡大で、訪れる人も激減してしまいました。

交通インフラについては、第三セクターのくま川鉄道が、人吉市の隣の錦町と終点の湯前町の間の区間のみ、昨年一月に一日六往復だけとはいえ営業再開しました。くま川鉄道は人吉球磨地方に住む高校生にとってほぼ唯一の通学の足であり、災害で不通になってから彼らは大変な不便を強いられました。営業再開した数日後に、臨時始発駅の肥後西村駅まで様子を見に行ってみました。狭い無人駅のホームに通学の高校生がひしめき合っていて、少し明るい気持ちになりました。

しかし、始発駅のある人吉と錦町の間は被害が大変大きかったため、開通にはまだあと数年かかる見込みとのこと。また、人吉から熊本方向に向かう、つまり都会の方向へ向かうJR肥薩線は鉄橋や線路の流失など、さらに被害が大きかったため、復旧の見通しは全く立っていません。よって人吉市内からどこか他の地域に行くには、自分で車を運転するか、タクシーで高速バス乗り場まで行き、バスに乘車する以外にありません。

### 営業再開した球磨川鉄道



人吉教会については以前ご紹介したように、長期間空き家だった旧司祭館を、被災者支援活動をしている方に無償で貸して、役立ててもらっています。現在は毎週土曜日に支援物資の配布所として開け、さらに月に一回、被災児童の会「アソビバ」のために開放しています。

### 被災児童の会集合写真



### 被災児童の会ミニコンサート

昨年末の十二月二十五日(土)には、「アソビバ」のクリスマス会ということで、信徒会館でのマリンバコンサートや、聖堂での私のクリスマスのお話やプレゼントなど、一人ひとりが集まった被災児童に喜んでもらえるような催しが行われました。復興への道のりは未だ険しく、遠いものがありますが、市民生活も牧会も、着実な歩みを進めていきたいと思っています。



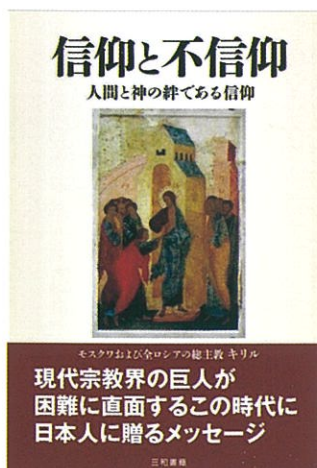
児童にお話する神父

正教をより深めていくために。

信仰のお供に！

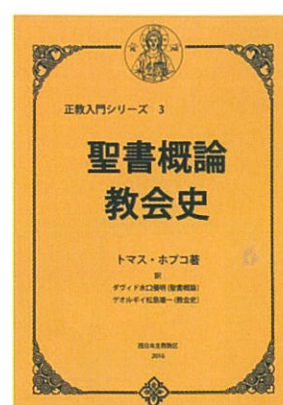
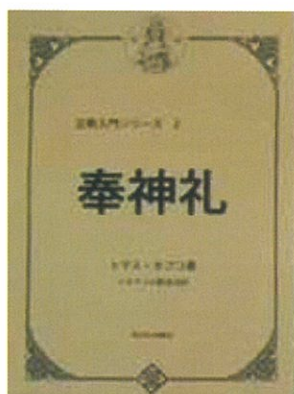
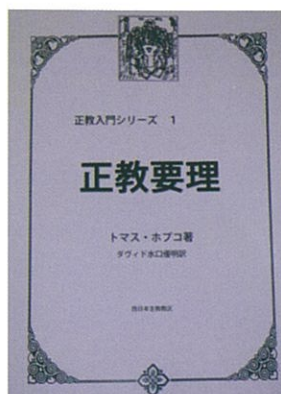
新刊本のご紹介！

- 1 総主教キリル、トロイツキー訳『信仰と不信仰 人間の絆である信仰』(ロシア正教会)、  
三和書籍、3740円  
(郵便振替ご利用 特価2880円 郵便振替 00180-3-38459番)
- 2 パウエル中西裕『ギリシャ正教と聖山アトス』 幻冬舎新書、1056円(税込)
- 3 パウエル及川信『クリスマス小品集 みちびきの星』 ヨベル、1540円(税込)



○正教入門シリーズ絶賛販売中！！

- 1 トマス・ホプコ、ダヴィド水口優明訳 『正教要理』
- 2 トマス・ホプコ、イオアン小野貞治訳 『奉神礼』
- 3 トマス・ホプコ、ダヴィド水口優明・ゲオルギイ松島雄一訳『聖書概論 教会史』

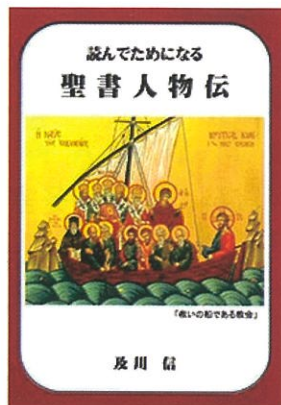
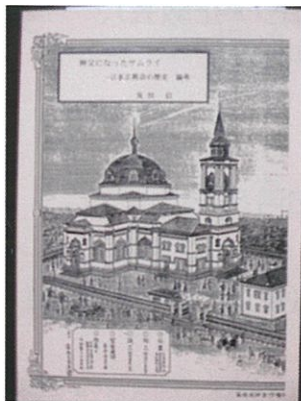


✿ 〈さらに正教会を知りたい人のために〉 ✿

○パウエル及川信『神父になったサムライ 日本正教会の歴史論考』1,000円

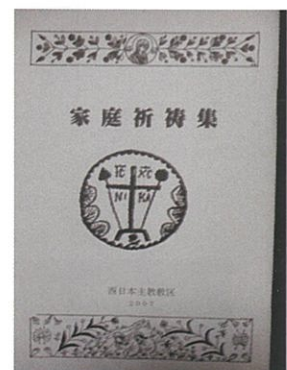
○パウエル及川信『聖書人物伝 読んでためになる』1,500円

○日本正教会の歴史『日本の光照者 亜使徒 聖ニコライの歩み』カラー刷 300円



〈ご家庭での祈りに〉

○『家庭祈祷集』 子どもがお祈りできるよう、すべてフリガナつき 500円



\*ご注文は、京都正教会あるいは、最寄りの正教会へお願いします

☆東日本主教区出版の本

○聖ニコライ・ベリミロビッチ、アナスタシア山崎佳代子訳 『善と悪をめぐる思索』より

○神品致命者セラフィム・ズヴェズディンスキー、土田定克/アレクセイ・ポタポフ訳  
『天のパン 聖体礼儀の意義をめぐる23の説教』

○修道士テオクトス・ディオニシアトス、イオアン長屋房夫訳 『天と地の間 天国への道標』

